済美の人 まち 暮らし

中崎1丁目
中崎2丁目
中崎3丁目
中崎西1丁目

中崎西2丁目
中崎西3丁目
中崎西4丁目
中崎南



OLD&NEW

「済美（せいび）」という名前　を知っていますか？

済美地域誌発行にあたって

私が地域活動に参加するようになったのは、扇町中学校のPTAに参加した34年ほど前からです。それまで、済美小学校を卒業してから36年ほどは地域との関わりをあまり持っていませんでしたが、「もっと地域を知りたい」と思うようになり、街のいろんな写真を撮影して、地域の方々に見せながら、少しずつ人との繋がりを持つようになりました。そんな私の昔の写真も、この地域誌の中に少し載っています。

済美にはたくさんの行事があります。私自身、済美が住みよい街になるよう、少しでも地域の役に立ちたいという思いを持ち、楽しみながら取り組んでいます。決して、イヤイヤやってなんかいません。きっと、活動に協力しているメンバーの多くが、私と同じような思いで取り組んでいるんじゃないかなぁ。

この冊子を手に取ったみなさんには「済美ってこんな街なんや」「いろんな人がいるんやな」と感じ取ってもらえれば幸いです。



済美連合振興町会 会長

南 順之介

Junnosuke Minami



Seibi? どうして中崎町を「済美」と呼ぶの？

大正９年（1920）、旧北野村と旧川崎村などが一つの学区（小学校設置負担区）として６つの小学校をつくりました。当時の大阪府知事が名付け親になり、６校は一斉に「済美小学校」と名乗りました。現在の中崎町は、この時の６校のうちの１校の校区に当たります。そのため、中崎・中崎西・万歳町をまとめて済美地域と呼ぶのです。済美地域には８つの町会があり、それらをまとめた大きな組織を済美連合振興町会といいます。中崎町ホールの壁に取り付けられているエンブレムは旧済美小学校の校章であり、現在は済美地区のシンボルマークとして使われています。

「済美」という言葉は、明治23年（1890）10月に発布された「教育勅語」に出てくる「世世厥ノ美ヲ濟セルハ」という言葉からとられたものです。美を済する、すなわち済美とは、美徳を成し遂げること。また、子孫が父祖の業を受け継いで善行を成すという意味です。

（地下鉄中崎町駅を中心とした　エリアを「済美地域」と言います）

第1章

今日も、明日も、町会で。

済美の1年 町会活動カレンダー

春



落書き消し


落語会


盆踊り練習会

夏




7月 豊崎宮夏祭り


7月 済美カーニバル





9月 敬老と地域の集い





11月 歩こう会



秋



12月 焼き芋交流会





冬







2月 中崎町キャンドルナイト

より住みやすく、安心な街へ　町会が力を入れていること

子育て支援「さくらんぼの会」









助け合いで、
子育てを楽しく。

子育て支援は町会が最も力を入れている取り組みの一つ。その中心が、毎月第1・4の月曜日に子育てママが集まる「さくらんぼの会」です。地域内外から毎回50人ほどのママが集まり、大盛り上がり。悩みを相談し合ったり、先輩ママにアドバイスをもらったり、子育てを楽しむためのサポートを行っています。

ミニセミナーも不定期で開催されるほか、毎年12月にはクリスマス会も。「本物?」と思ってしまうサンタクロースは子どもたちに大人気。小学校入学までのお子さんがいる方なら誰でも参加できます。

高齢者食事サービス





できたてを
食べてもらいたい!

毎月2回、第2・4土曜日のお昼に開催。主催は高齢者食事サービス実行委員会で、調理は済美地域女性会の方々の手作りです。お弁当や出来合いのものではなく、済美福祉センターの調理室で作ったできたてを提供するのがこだわり。1人1回300円で、ときにはカニすきやすき焼き、サイコロステーキ、松茸ご飯といった豪華なメニューも登場します。

毎回60〜70人が参加し、いつも元気でにぎやか。65歳以上の方は気軽に参加してみてはいかがでしょう。

防災・避難訓練









いざという時のための準備を。

子育てと並んでもう一つ、防災に関する取り組みにも済美連合振興町会は特に力を注いでいて、毎年11月には防災・避難訓練が行われます。町会ごとに決められた避難場所に集合し、済美福祉センターへ向かい、町会ごとの名簿で安否確認を行います。その後は、物干しざおと毛布で担架を作る訓練やバケツリレーでの消火活動、ホールではＡＥＤの講習会も行われます。

若い夫婦や子ども連れの参加者も多いのが済美らしいところ。こうした機会に生まれたつながりが、いざという時に自分の身を守ってくれるのです。

防犯





地域の安全は地域のみんなで。

地域のみなさんが安心して毎日を過ごすための地道な活動も行われています。町会の防犯担当では、毎週木曜日の夜7時半から1時間ほど、安全パトロールを実施（コロナのため一時中断）。また、毎週月曜の早朝には、子どもの見守りも行われています。さらに、毎月第3月曜の午後3時から30人ほどで構成される「地域安全パトロール隊」では、地域の各種団体から2名ずつが参加し、地域のみんなで子どもを見守る体制づくりを行っています。パトロールや見守りに協力してくれる方も募集しています。

住む人たちに聞いた　済美って、こんな街

昔も今も、地域の人たちが集うお寺に。

門川崇志・崇子さん（浄方寺住職・主婦）

Takashi Kadokawa
Takako Kadokawa



平成29年（２０１７）、先代の住職から寺を引き継ぎました。子どもが集まることができる「場作り」をしたいと考えて、住職になってすぐ、「花祭り」を体験してもらいました。その途端に、コロナになってしまったのは残念です。これからは、子どもたちが宿題や勉強ができる寺子屋のようなこともやっていきたい。仏教で大切にしている命の大切さや命の繋がりを、子どもたちに伝えていければ。

私が生まれた当時、この地域には子どもが多かったんですが、ご年配の方の姿が目立つ街になって行く末を心配していました。最近は、アーティストの方をはじめとして若い人たちが戻ってきて、また、子どもが増えてきましたね。めまぐるしく状況が変わっていく中でどう対応していくのか。手探りではありますが、楽しみな地域ではありますね。（崇志さん）

住職が寺を引き継ぐのと同時に、こちらに住まいを移しました。子どもは小学2年生と4歳。どちらも男の子です。このあたりは梅田に近く、車も多くて、横断歩道が危ないんですが、小学校の通学路には毎朝地域の方が立って、子どもを見守ってくださっているので安心して子どもたちを送り出すことができます。親としてはありがたいです。

浄方寺は都会のお寺で、中崎町の駅からも近いのですが、少しお庭があるので、子どもたちがよく入ってくるんです。息子の友だちもよく遊びに来てくれて、そのとき本堂を見せてあげたりしています。少しずつお寺に興味を持ってもらい、地域のお寺として皆さんと関わっていけたらいいですね。（崇子さん）

ずっと、この街で暮らしていきたい。

高橋涼子さん（ソーシャルワーカー）

Ryoko Takahashi



結婚する前、学生だった妹と済美地区に暮らしていました。ここから離れたくないな、結婚してもここに住みたいなと思って、今に至ります。

子育てする環境としては、本当にいいところですね。子どもがいることで、地域とのつながりも増えました。育児休暇を取った1年間、女性会の活動に参加したんですが、相談に乗ってもらえたり、イベントがあれば誘ってくださったりして助かりました。みなさんが温かく迎えてくださるので、毎月行こう！という気になりましたね。

特に栗澤さんにはお世話になりました。夫にも「あんたも子育て手伝いや！」と言ってくださって（笑）助かりました。

ありがたいことにおもちゃや絵本、小学校の制服や水着などご近所からよくお下がりをいただきますが、別の子の名前が書いてあったりして、お下がりのお下がりだ！と（笑）。地域のつながりの強さを感じます。

済美カーニバルには、輪投げをはじめ、いろんなゲームコーナーがあるんです。得点の分だけ券をもらえて、好きな駄菓子やクワガタと交換できるので、子どもたちもすごく楽しみにしています。親の私たちも楽しみながらお手伝いしていますが、少しは地域の役に立っていればいいなって。毎年カーニバルに行くと、町内会の方が変わらないでいてくださることにすごく安心します。

私も子どもの成長と共に、できるところまで地域の活動に関わりたいですし、歳を取って定年退職したら、女性会をお手伝いできたらと。いろいろ助けていただいたので、地域に何かお返ししたいな、と思っています。

Atsuko Ninomiya

地域のつながりがあって、おもしろいところ。

二宮敦子さん（主婦／済美に住んで10年目）



令和4年（2022）の2月で済美に来て10年になります。主人は京都の会社に勤めていて、会社に行くときも、梅田から乗れば座って通勤できる。私と主人の実家にもアクセスしやすくて、ここに住むことを決めました。子どもが幼稚園に上がってからは、当時の女性会の会長（栗澤さん）にお声がけいただき、「さくらんぼの会」をお手伝いするようになりました。

マンション住まいだと隣近所の付き合いがなかなか難しいのですが、この会のおかげでお知り合いが増えましたね。この2年は、コロナで地域活動ができなくなって寂しいです。今までイベントなどで会っていた人たちと道ですれ違っても「お久しぶり。コロナ、早く終わるといいね」って。令和3年（2021）の夏は、毎年子どもたちが楽しみにしていたラジオ体操も中止になりました。皆勤賞だと、子どもにはおやつや図書カードが、大人にはスーパーの商品券がもらえるんです。令和4年（2022）はぜひ復活してもらいたいですね。

梅田まですぐですから、気分を上げたいときはウインドーショッピングに出かけたりします。扇町公園も近く、淀川の河川敷も足を延ばせる距離にあります。便利ですが、地域のつながりもちゃんとあって、バランスがいい街ですよね。最近は雑貨店やカフェも多くて、若い人にも人気があります。これからも、ずっとこの街で暮らしていきたいと思っています。

Nao Yokomine

地域に相談できる人が、こんなにいる。

横峰奈緒さん（主婦／済美に住んで10年目）



二宮さんとは「さくらんぼの会」で知り合いました。「同じマンションですよね？」って声をかけていただいたんです。引っ越してきたばかりで、知り合いもなく身内も近くにいなかったので、うれしかったですね。

毎年、「さくらんぼの会」のクリスマスのときは、ママをねぎらうためにケーキが用意されるんです。大人気のイベントで、ママたちは本当に楽しみにしています。「お母さんはふだんゆっくり食べられないでしょ？　子どもたちは私たちが見ておくからね」って……。ママたちが愚痴を言いあったり、相談できたりする場があるのはすごく助かりました。例えば、どの幼稚園に通わせるのがいいか、どこに幼稚園のバス停があって、どこまで連れていったらいいのか……、ここに住んでお子さんを通わせた経験のある方じゃないとわからないことを教えてもらえて心強かったです。

済美地域の女性はとにかくパワフル（笑）。昔から地元に住んでいらっしゃるみなさんがしっかり支えてくださっています。ここ最近、マンションに住む20代、30代の若いママたちも増えてきました。SNSをうまく使うなど、これからは、世代間のコミュニケーションをどんな風に取っていくのかが課題になってくるのかもしれません。団塊ジュニア世代が果たす役割はそんなところにあるのかな、と思っています。

Kiyokazu Einishi

済美の個性は派手なところ。

栄西清一（えいにし）さん



私は昭和12年（1937）生まれ。今の北野病院近くの産院で産まれました。家は大正13年（1924）、祖父の代からここにあります。

済美の特徴は何かなあ。一つ挙げるとすれば、地域活動をする人たちにやり手が多いというか、なんでも派手なところかな。だって済美カーニバルなんて、徳島からバスをチャーターして阿波踊りの連を引っ張ってくるんやから。よその地域の方から羨ましがられるけど、町会の人たちが企業にご挨拶に回ったり、マメに熱心にやっているからこそ毎年ちゃんとできるんです。いい加減ではできない。済美の伝統ですね。

Haruo Kaneyama

ラジオ体操とともに。

金山治男さん（北区体育厚生協会済美支部 支部長）



済美地域に住んでほぼ40年になります。朝早く出て夜に帰宅する仕事なので、当初は近所の方々とのコミュニケーションが取れませんでした。

住み始めて約1年後、中崎西一振興町会班長に。その2年後、町会青年部長になり、ラジオ体操を任されるようになりました。これが地域との繋がりの原点で、今日に至っています。

現在は中崎町コミュニティ広場で毎年8月、連日約100名とラジオ体操を行っています。かつての子どもたちが子ども連れで参加してもらえるのは感慨深いですね。ラジオ体操を通して、地域の大事な宝を温めていきたいです。

❶【地域活動への思い】

子どもを育てる人の力になりたい。

栗澤イツ子さん（済美女性会 相談役
北区地域女性団体協議会 相談役）

Itsuko Kurisawa



子育て支援サークル「さくらんぼの会」（P6）を立ち上げたのは平成13年（2001）2月5日のこと。当時は子どもの虐待についてよく報じられていて、なんとか子どもを救う方法はないかと考え、お母さんの悩みを聞くために始めたんです。最初は浄方寺の裏手にある会館で、3〜4組の親子を集めて子どもと一緒に遊ぶのを手伝うようなことから始めました。

小さな集まりでしたが、これからどんどん増えると思っていました。私は民生委員や児童委員、人権擁護委員も務めていましたから、悩んでいる若いお母さんが多いことは知っていたんです。その後、口コミでどんどん新しい人が来るようになりました。

昔のことを思い出すと、今でも涙が出そうになります。

夫に暴力を振るわれるからと、夕方になったら必ず訪ねてくる人がいました。話を聞いたりなぐさめたり、周りの人にも気にかけてあげるように伝えたりして。その後、引っ越してしまったけれど、数年経って「今はもう落ち着きました」と訪ねてくれた時は思わず涙が出ました。体の弱い子どもを抱えていたお母さんや、自殺を考えるほど悩んでいる人もいましたね。

幸い、今はそれほど深刻な状況の人はいなくなりました。毎月の行事には100人近く参加してくれます。以前赤ちゃんを連れてきていたお母さんが、卒業後はサポート役に回って、会の運営を手助けしてくれています。すごいことですよね。

悩みを打ち明けてくれる人の数は少なくなりましたが、規模が大きくなったぶん、相談しにくいのかもしれません。でも、「話を聞くよ」と言うと、終わっても帰らずに待っている人がいたりします。やっぱり子育ての悩みを抱えている人は多いんです。そんな人は家に来てもらってもいいし、電話でもいいから話してほしい。「さくらんぼの会」はこれからもそういう場でありたいと思っています。

そのほか、地域の行事に協力してくれる地元の中学校の吹奏楽部の楽器が古く、傷んでいたので、関係機関にお願いして新しくしてもらうことも実現できました。

今後も子どものためになることを続けていきたい。だって、子どもが生まれなければ地域はなくなってしまうんですから。





さくらんぼの会を運営するみなさん。地域活動の後継者に不自由しないのが済美の強み

子どもたちを守ることが、地域を守ること。

窪田耕一さん

（曽根崎防犯協会済美地区支部長）

Koichi Kubota



令和元年（２０１９）に済美地区支部長を拝命しました。過去の支部長の皆さんより人格、識見ともに未熟ではありますが、済美地区の「安全安心」に少しでも役立つように頑張ってゆく覚悟です。

警察官を定年退職後、平成26年（２０１４）から防犯委員として活動していますが、地域の人は温かく、優しい気持を持って接してくださいます。皆さん、弱い人たちに対して思いやりがあるし、声かけが上手なんですよ。「兄ちゃんえらいすみませんね、すぐ終わるから」って。

防犯協会では、地域の子どもが交通事故や性的ないたずら、連れ去り事案や暴行などに遭わないように、ユニフォームを着てパトロールしています。

毎年７月、豊崎神社のお祭りがあるんですが、伝統を継承する以外にも、祭りという祝祭は人をつなぐ大切なものだなとつくづく思います。子どもたちに祭りに参加してもらって、大きくなっても地域に根ざした生き方をしていただけたら。

そのためには、どんなことがあっても祭りで事故だけはしない、させない。防犯委員である私たちにとって、祭りが無事に終わることが最大の務め。子どもたちの笑顔に触れ、歓声を聞いたら疲れも吹き飛び、よかったなと思います。コロナで２年間中止になりましたから、令和４年（２０２２）こそはぜひ再開してもらいたいですね。

ここ数年、防犯委員の高齢化が進み、委員の数も減少しています。地元に住む40代、50代の人に一人でも多く防犯委員を志していただくことを、心から願っています。

地域のつながりは、お金には代えられません。

中上隆雄さん

（済美地域社会福祉協議会会長）

Takao Nakagami



済美地域に住んで60年近くになります。結婚して、子どもができて、地域の活動に参加するようになりました。最初の頃は、済美カーニバルや盆踊りの費用を捻出するために町会で寄付を集めていました。皆さんの家を訪ねていくと、玄関の戸が閉まっていく音が聞こえるんです。「あんたらの顔を見たらお金が要る」って。お願いすると、機嫌よくお金をくれはるんですけれども……。今は、企業の寄付や区からの助成金、町会費で賄うようになったので、一軒一軒お金を集めることはなくなりました。

済美の社会福祉協議会では、敬老の日の集いと、地域の役員が集まって新年の挨拶を行う新年互礼会のお世話をしています。敬老の日の集いでは、金婚式を迎えられた方に食事券を、80歳になられた方に記念品をお渡しし、食事会と太極拳や詩吟などの発表会をやっていました。でも、この２年はコロナで会を開くことができず、記念品をお渡ししてお弁当を持って帰ってもらうようにしています。

僕が町会に入ったときは一番下の世代だったけれども、実は今も僕の下より上にいる人が多いんです。

30年くらい前、地方の過疎化が取り上げられていましたが、今は都会の済美地域でも同じことが起こっています。今、活動に関わっていない方も年齢を重ねたとき、地域のつながりがないと、やはり困ると思うんです。地域のつながりはお金には代えがたい大事なものですから、より多くの人が活動に参加してほしいと思いますね。

人は助け合って生きていくもの。

松井二三枝さん（済美地域活動協議会 会長）



Fumie Matsui

昭和49年（1974）から済美地域で暮らしています。当時は周りに高い建物がなく、自宅の3階から梅田まで見渡せたんですよ。最初はあまり知り合いもいなかったのですが、子どもを通じて少しずつ地域とつながりができました。

本格的に地域活動に参加したのは平成19年（2007）。子育てが一段落した私に、女性会の会長をされていた栗澤さんがボランティアに参加しない？と声をかけてくださって。それで子ども家庭支援員の活動を始めることになりました。子育てに行き詰まっている家庭を週に一度訪問。話を聞いたり、クリニックや子育て中の検診に同行したりもしましたね。最初は、私の連絡先を相談者に教えてはいけなくて、連絡をするときは役所を介すことになっていました。でも、それだとなかなか連絡が取れないんです。教えても命を取られることはないかと思って、役所には内緒で私の電話番号を直接伝えました。それでも約束した日に訪問したら、相手の方が留守だったことも。いろいろありましたが、今でも、当時出会った方から年賀状やメールをいただきます。うれしいですよね。

平成28年（2016）から4年間、女性会の会長を務めさせていただいた後、令和2年（2020）、済美地域活動協議会の会長を仰せつかりました。最初は悩みましたね。日本はまだ男社会なので、会に出ても女性が一人だけ、というときもあるんです。一人でも二人でも女性が増えれば「おたくの地域はどうですか？」という話もしやすいのですが。

地域に済美小学校、扇町中学校があったときは、学校のPTAで関係を作りやすかったのですが学校がなくなってしまい、地域との接点が作りづらくなりました。だからこそ、済美カーニバルや焼き芋大会といった行事のときに、新しく来られた方たちとうまくつながっていければ、と思っています。

人間は誰かのお世話になったりなられたり、助けあって生きていくものだと思います。地域活動に参加すると人とのつながりができ、何かあったときに心丈夫です。若い方にもぜひ興味を持っていただきたいですね。

楽しいカーニバルを次世代につなげたい。

安田千秋さん（済美カーニバル実行委員長）

櫓もゲームも、何でも手作りで。

武田敏夫さん（済美地域活動協議会前会長 済美カーニバル前実行委員長）

Chiaki Yasuda



　済美カーニバル実行委員長に令和2年（2020）、就任しました。コロナの影響で2年間、済美カーニバルが開催できなかったので、実行委員長になった実感は、まだ全然湧かないです。気負いもあまりないです。私一人でやるわけではないし、地域の人が何十人ものチームでやりますからね。みんなボランティアで、よく動いてくれます。ちょっと声をかけたらすぐ集まってくれますから、ありがたいですよ。

　令和3年（2021）10月、済美カーニバルで使うものを置いている倉庫を、整理も兼ねて開けました。2年間開催できなかったこともあり、舞台の床も腐っていて、打ち直したんです。パターゴルフや射的など、カーニバルで使うゲームもほとんど壊れていてとても残念だったのですが、たまたま地域にレトロなゲームを扱う人がいたんです。それらを済美カーニバルで使わせてくれないかとお願いに行ったら、快諾してくれました。令和4年（2022）のカーニバルは、本格的なゲームで皆さんに遊んでもらえると思います。

　毎年、7月の最終土曜日に行われる済美カーニバルには、第1回から関わっているんです。済美小学校の校庭で行われた盆踊りが最初で、段々規模が大きくなって、地域の団体が参加するようになりました。今は、四国から阿波踊りの連がやって来て、大阪の連も呼んでみんなで踊るんです。翌日曜日には、アマチュアバンドがステージで演奏。会場に入れないくらい人が集まる、本当に楽しいお祭りです。

　今後は若い人たちが中心になって、済美カーニバルをやっていってほしいし、そうでないといけないなと。「やるわ」って自分から言ってくれる人はなかなかいないんですけど、時間をかけて、みんなでゆっくり育てていければいいかな、と思っています。

Toshio Takeda



　自動車整備士の仕事をしていて、もともと自分でいろいろなものを作ったりして、それで誰かが喜んでくれるのが好きなんです。済美カーニバル（P4）では、子どもたちが楽しめるものであってほしいという願いを込めて、いろんな備品やゲームを作ってきました。自分で言うのも何だけど、けっこう評判が良かったんですよ。

　まずは櫓。以前は、お酒のケースにパレットを乗せたもので、設営するのに丸3日もかかっていました。そこで、思案してトラックを舞台にした櫓をまず作ってみたんです。その後、さらに改良して今使っている櫓を作りました。実はあの櫓は普段は済美福祉センターの倉庫として利用されているんです。カーニバルで使う時は、板壁を開けば舞台に早変わり。これなら半日あれば組立てることができるんです。よその地域からも、「あれ、作ってよ」と頼まれる優れものなんです。

　カーニバルで用意している子どものゲームコーナーも、時代ごとに合ったものを作るようにしています。初めは射的やパチンコやくじぐらいしかなくて、ありきたりで寂しい感じがしていました。ちょうどその頃、テレビ番組で「イライラ棒」というゲームが流行っていたので、特大サイズのものを作ってみると、みんなとても喜んでくれました。最近では、チョロQを使ったゲームやパターゴルフ、魚釣りゲーム。スーパーボールとエアガンを使った射的も作りました。

　参加してくれる皆の笑顔が見たくて、老骨に鞭打って、仕事が終わってから作業しています。カーニバルをより良くしたいと思う人たちと意気投合して、協力しながら進めています。今は子どもが増えてきたので嬉しいですね。やっぱり地域のことや行事については若い人たちにもっと知ってもらいたい。スタッフとして力を貸してくれることを願っています。



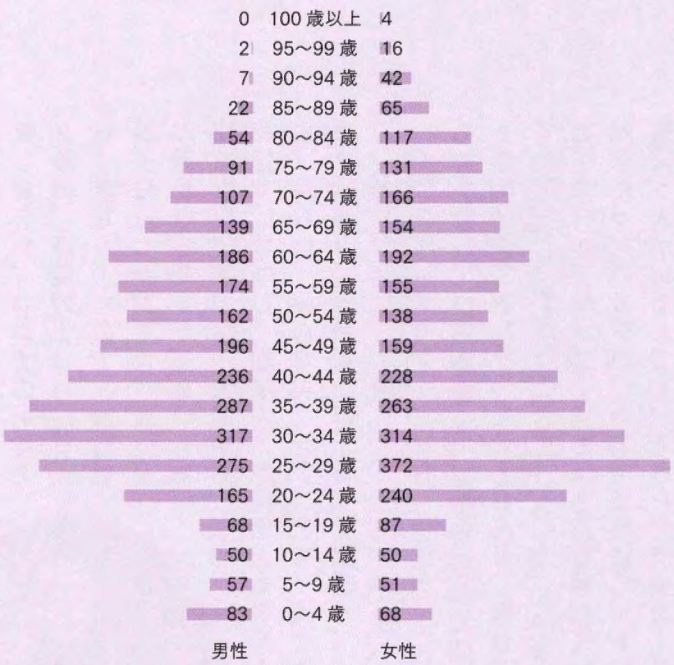


武田さんが自作した櫓にもなる倉庫は、済美福祉センターで使われている

済美地域の人口の推移と町会のゆくえ。

鯵坂 学（同志社大学社会学部名誉教授）





　済美地域には昭和初期までの細街路が残り、梅田と天神橋筋との間にある庶民的な下町の住宅街として存続し昭和35年（1960）時点では8684人という多くの人が住んでいた。

　しかし、高度経済成長が始まり、人口の郊外化の中で、この地域の住民の跡継ぎ層の多くも郊外や首都圏などに移って行き、人口は減少して子供の数も減り中高年者が残り、空き家が目立っていった。

人口の回復とマンション建設

　バブル経済がはじけた後の平成7年（1995）の人口は4056人、世帯数は2124であったが、これをボトムとして人口の「都心回帰」が始まり、済美地域でも増加が見られた。令和2年（2020）では人口は7487人、世帯数は4782となり、この25年では人口は1・8倍、世帯数は2・3倍となっている。図のように平成22年（2010）現在の年齢構成は、20代後半から40代前半の世代がかなり多く、10歳以下が少ないキノコ型となっている。おそらく事務職やサービス職、販売職の単身の若い層が多く、そして幼児が少し増えていることからファミリー層も増えていることがわかる。

　これらの人口増加の原因は、済美地域に急速に増えた大小のマンション建設によるものである。我々がおこなった北区のマンション住民の調査では、新たに流入してきた新住民の前住地は、大阪市内の他区（25％）、大阪府内の他市町村（23％）、同一学区内（16％）、兵庫など関西の他府県（約14％）、そして北区（13％）、その他の都道県（9％）の順であり、大阪都市圏の郊外からの人が多く、地元になじみのある人は少ない。

レトロなショップやカフェ

　平成12年（2000）ごろから済美地域に残された町家や長屋を改装したショップやカフェが見られはじめた。当初は、テナント代が安いということで梅田などにお店が出せない若手の起業の第一歩として済美地域の古屋・長屋を借りての開店が多かった。しかし、昭和にタイム・スリップしたようなレトロな雰囲気が注目されて、出店者が増え、今では100軒近いお店がこの地域に点在するようになった。

　経営者の多くは地域外からの人である。これらのお店が「中崎町」の名で週刊誌やマスコミで取り上げられることにより、大阪市内や府内からだけでなく、

あじさか・まなぶ

同志社大学社会学部名誉教授。文学博士。研究内容は現代都市・地域社会の実証的研究。町内会や自治会などの地域住民組織・集団に焦点をあて、コミュニティ形成や都市生活環境、都市問題などについて、フィールドワークなどを取り入れて実証的研究を行う。済美地域においてもフィールドワークなどを行った。近刊に大内多鶴子・鯵坂学・玉野和志編 2021『世界に学ぶ地域自治 コミュニティ再生のしくみと実践』（学芸出版社）がある。

兵庫県や首都圏からのお客さんも土日を中心に増えている。また近年は海外でも有名になり、インバウンドも増えている。こうして、済美地域は中高年者を中心とした昔から住む住民層、近年マンションに越してきた新住民層（単身者とファミリー）、出店してきた若い経営者層（特に女性）、さらにこれらのお店を訪れる他都市や他区からの若者層＋中年の女性層に分けられ、さまざまな思いを持った「交流・結節」の場所となっている。

町会のゆくえ

都市の中で、さまざまな個性・特徴を持った住民層をまとめてきたのは、日本の地域社会に独特の住民組織といわれる町内会・自治会である。大阪では明治期からの町会が、戦後の改革の中で「大阪市赤十字奉仕団」として再組織され、昭和50年（1975）からは大阪市行政の指導によりコミュニティづくりを目指す「地域振興町会」として再編されてきた。80年代までの人口の減少と高齢化、2000年代からの人口の増加の中で、済美地域の町会は二極化（活性化と沈滞化）の方向にある。

地域の町会やその連合会（連合振興町会）を担ってきたのは、以前からこの地域に住む旧くからの住民であり、近年マンションに越してきた新住民との関係について、「どんな人かわからない人が多く、これまでの人間関係が壊されないか」と心配する人もいる。一方、新住民の中には、町会などの近所付き合いが苦手な人も多く、町会の加入には積極的とはいえない。そのため、他の大都市の都心区と同様に、済美地域では町会への加入世帯は半分以下となっているのが現状である。

済美地域には70年代に大阪市行政により再編された町丁目として8つの町があるが、町会はそれ以前からの町のまとまりを維持していて、町丁目の区域とはずれがあり、8つの町会がある。いくつかの町会は祭りを中心とした活発な活動を行い、地元氏神の夏祭りとして神輿を出し、マンション住民も「子どもに祭りの経験をさせたい」として、その多くが町会にも参加している。

また、町会の人が葬儀を手伝う「町会葬」も行われている。一方で旧来からの活動を主におこなっている町会では、年1回の親睦会（宴会・日帰り旅行）をかねた総会を中心に運営しているので、新住民の参加はほとんどなく停滞状況である。

これらの8つの町会をまとめているのは連合振興町会であり、これを核として平成17年（2005）には地域活動協議会が組織され、地域全体を視野に入れた活動を行っている。夏には地域の社会福祉協議会との共催で「済美カーニバル」を開催し、述べ500人を超えるボランティアスタッフが関わり、1500人以上の参加者を得ている。これにはマンションに住む新住民も参加しており、地域住民の交流の場となっている。

地域には廃校となった済美小学校の跡地の3分の1（残りの敷地は売却され大規模マンションが建てられている）に建てられた済美福祉センターと広場、地域集会所・老人憩の家があり、地域活動がなされ、地域の防災・防火・安全の拠点となっている。

新・旧住民の関係を紡ぐ

済美地域には古くからの住民の間には「あたたかい人情あふれる」関係が存在するが、多くの新住民同士の間や旧住民と新住民の間には、お互いに疎遠な関係が見られる。新住民の多くは、「べたべたした」近隣関係よりも自分の選好を重視した「さらっとした関係」を好む人々が多いと思われる。

しかし、災害や安心・安全への対応、子育てや高齢者などの見守りなどを考えると、節度のある地域コミュニティの形成はやはり必要であろう。その点で、旧来の神社に由来する祭であれ、新しいイベントとしての祭りであれ、祭りや親睦こそが多様な住民の絆を紡ぐ関係資源となっているようである。



Itoe Koike

葉村温泉［銭湯］ 小池絲枝さん

中崎西1丁目にある銭湯［葉村温泉］は、午後3時になると色鮮やかな暖簾がかけられ、風呂桶をもった常連の方たちが吸い込まれていく。梅田から近い銭湯ということもあって、近隣の常連だけでなく、サラリーマンや夜行バスに乗る前の若者など客層は幅広い。サウナ、水風呂、露天風呂、超音波気泡風呂が揃っている。

「主人のお祖父さんが銭湯をはじめたのは明治の終わり頃です」と語るのは小池絲枝さん。現在は銭湯を三男に任せているということで、4代にわたって経営されている。

実家は山一凸版印刷の2階。「9軒隣の通っていた銭湯に嫁いだ」と笑う。葉村町（P30－31地図参照）と呼ばれた当時は長屋が連なるまちだった。

「当時はみんなが助け合っていました。近所の子どもを叱ってあげたり、叱ってもらったりと目をかけてもらっていました。主人が若い頃は、大八車で廃材をもらってきて、それで風呂を沸かしていたそうです」

嫁いだ頃は今と営業時間が違い、午後2時すぎにはオープンして、深夜1時頃まで開けていたという。

「マンションもなかったのでよく流行っていましたね。朝は脱衣所のお掃除をして、子どもを保育園に連れていき、家事をして、銭湯の掃除をして……とやっていました。休みの日は主人と銭湯まわりをして、良いところを参考にしていました」

絲枝さんが考える葉村温泉のこだわりは清潔感や気持ちの良いあいさつ。「誰もが気持ちよくなってもらうために心がけています。銭湯が好きなので、ずっと続いていけばいいなと思っています」





現在は15時から23時までの営業

済美住民の心と身体をあたため続けて、百十年。



Masako Yoshikawa

アート工房 三島屋提灯店［提灯］ 吉川雅子さん

中崎1丁目の交差点から南に延びる通りに提灯が陳列されているビルがある。［三島屋提灯店］の工房はこの2階だ。

「幼稚園の頃から手伝わされていました」と語るのは代表の吉川雅子さん。妹の貴子さんとともに、近所のお店におつかいに行っていた。子どもの頃の遊び場は本庄公設市場。市場の中を走り回っていたそうだ。

「うちの親戚もみんな手伝わされているんです」と笑いながら筆入れした提灯を天井のカーテンレールに吊るしてゆく。外から見える提灯は、乾かすために陳列されているものだった。中学生の頃は提灯に「御神燈」の文字を塗ってから部活に行っていたのだとか。

三島屋提灯店は雅子さんの祖父が昭和3年（1928）10月5日に始めた提灯屋で、あの阪急百貨店よりも1年古い。JR総持寺駅近くの三島村出身で三島屋という屋号になった。提灯は竹と和紙でつくるため、昔は和傘も扱っていた。

家族総出で慌ただしくなるのは6月から年末まで。特に歴史のある太融寺で毎年行われる年末の行事がピークとなる。

「不動明王さんが祀られているお不動さんの周りに提灯を300台吊るします。高校生ぐらいの頃から手伝っていました。12月30日の年中行事です」

父が亡くなって以降、銀行員を経て戻ってきた雅子さんは、母の二三子さん、妹の貴子さんたちとともに仕事をしている。三島屋のホームページも立ち上げ、ネットオークションの会社からの依頼でライブ会場に使う提灯をつくるなど、時代の波に乗った経営をしている様子だ。



上／手前が雅子さんで、奥が妹の貴子さん　下／神社仏閣用（社寺、神輿用提灯）、看板用の提灯が得意

時代にあわせた手描き、手づくりの提灯。



Hisako Fukudome

趣味の店ホリイケ［駄菓子店］　福留久子さん

中崎西1丁目の南北を走る道路沿いにある駄菓子店［趣味の店ホリイケ］。午後3時頃になると学校帰りの子どもたちが足早にやってきて、それに急かされるように福留久子さんがシャッターを開けるのが日課だ。

入り口付近には自転車が並び、店先に出した机には子連れのお母さんや子どもたちが座って話しはじめ、あたりが急に賑やかになる。店内は昔ながらの駄菓子のほか、文房具なども揃っている。子どもたちに人気の「すみっコぐらし」や「鬼滅の刃」などの商品は、全部お店に来る子どもたちから教えてもらって仕入れているのだそう。

「私はここで生まれ育ちました。もともと両親がメリヤス工場をしていて、この場所と豊崎に工場を持っていました。オートメーション化しはじめた大阪万博の頃に工場を畳むことになって、済美小学校が近くだったのもあって、駄菓子屋をはじめたんです」

趣味の店という店名は「なんでも置ける店にしたら？」という祖父の発案。久子さんの父親がコマなど趣味の商品を並べていたけれど、いつしか店頭に並ぶのは駄菓子が大半になったそうだ。結婚し、東京で暮らしていた久子さんは、夫の転勤で大阪に戻り、両親に代わって店主となった。

「子どもの頃は小さな商店通りでした。お隣は魚屋さん、乾物屋さん、そしてお向かいもお店をされていてにぎやかでした。同じ通りの葉村温泉の小池絲枝さん（P16）は済美小学校の同級生。同窓会でも地域の話をしますよ」



上／子どもたちを引き寄せる大きなおもちゃ箱のようなお店と、福留さんのいいお顔　下／2016年発行の地域誌をちゃんとお持ちでした

時代を超えて子どもが集う、まちの人気スポット。



Makoto Kai / Naho Mizoguchi

山一凸版印刷［活版印刷］　甲斐誠さん　溝口奈穂さん

前回の地域誌（２０１６年発行）には、先代の山﨑節雄さんが誌面に登場してくれた。今回は、その後を継いだ孫の２人が力を合わせて奮闘するさまを取材した。創業者・山﨑節雄さんの長女の娘が溝口さん、三女の息子が甲斐さんという、いとこ同士である。

「子どもの頃からバタン、バタンと印刷機の音が鳴り響いている場所でした。祖父が昭和39年（１９６４）に開業して、お菓子を入れるフィルムやお米を入れる袋、箱などを活版で印刷して、すべて手作業で作っていました。母も私も少し手伝って。いま製造しているのもどら焼きの袋などで、こういった依頼が主です。それにしても、山一凸版印刷を引き継ぎたいと誠が言ったときは驚きました」（溝口さん）。

甲斐さんが続く。「それまで僕は製薬会社で働くサラリーマンでした。でも祖父が亡くなった２０２１年２月３日はコロナ禍の真っただ中で、転職を考えていた時期でもあったのですが、あの印刷所を閉めるのはもったいないと感じたんです。それで７年近く祖父の手伝いをしていた奈穂さんや、機械のメンテナンスをしている方たちから仕事を教わりながら、なんとか機械を動かし、作業を覚えていきました。仕事に慣れたら、もっと販路を広げていこうと考えています」

甲斐さんは大阪でも西区が地元だが、溝口さんは済美で育った。

「子どもの頃は草が生い茂る空き地でゴム飛びとかして遊んでいましたね。同じ通り沿いのラーメン屋［八番］には変わらず通っています。街並みはどんどん変わるけれど、たまに近所で同級生や知り合いに会って話し込むのがうれしいです」と言えば、甲斐さんも「こないだふたりで駄菓子屋の［ホリイケ］（P18）に行ったときは懐かしかったし、楽しかったですね」と受ける。

２０２４年には創業60年。押しも押されもせぬ済美の地場産業だ。



築100年近い建物はふたりにとっては祖父母の家。溝口さんは葉村温泉（P16）にも手伝いに行っている

ふたりの孫が引き継いだ「おじいちゃんの印刷所」。



Ayako Nishihira

にしひら内科クリニック［診療所］　西平綾子さん

平成28年（2016）1月20日に中崎西1丁目で開院した。「もともとこの場所には昔から加藤医院があり、院長先生の娘の宮武圭子先生が内科をされていたのですが、体調を悪くされて、内科を継いでくれる人を探しておられました。当時、私は堺市の透析病院で勤務医をしていました。お声をかけていただいたときは36歳の時で、開業するにはまだ早いかなと思ったのですが、宮武先生から『済美地域には大きな病院はあるけれど、ちょっとした風邪や腹痛や健診結果を診てもらえるような場所が少ない』と聞いて、自分もやってみようと思ったんです」

病院勤務の頃は高齢の患者が多かったが、済美で開業すると一変した。「専門学校の学生さんや近隣のサラリーマンなどの若い方もいれば、元々地域に住む年配の方もいて年齢層が幅広く、やりがいを感じています。数年前に、近くの岡村診療所が閉院されたのですが、岡村先生からの紹介で、もともと通われていた地元の患者さんも来てくださっています」

西平さんは済美の街並みが気に入っている。古い民家であっても中はおしゃれなカフェになっていたり、昔のたたずまいを残しつつ新しいものを取り入れているレトロな雰囲気が好きだという。

「済美地域を訪問診療などでウロウロしているので、いろいろ見て回っています。往診バッグを持って歩いていると、地域の方に声をかけてもらえるのがうれしいですね」

何でも気軽に相談してもらえるような、地域に根ざしたクリニックを目指している。



三重大学医学部を卒業後、大阪市立大学医学部附属病院卒後臨床研修修了。堺市の病院勤務を経て、中崎西1丁目で開業。診療科目は内科、腎臓内科、糖尿病内科、禁煙外来、アレルギー検査、睡眠時無呼吸症候群などに対応

済美のかかりつけ医として健康管理のお手伝いを。

明治から受け継がれる、金網を操る技術。

吉川金網［金網加工］　吉川一郎さん

Ichiro Yoshikawa

中崎西4丁目の道路沿いにある長屋1階の作業場から、パン、パン、パンと木に釘を打つ職人の姿がガラス戸越しに見える。金網加工に打ち込んでいるのは吉川一郎さんだ。

吉川さんは3代目にあたり、初代の源三郎さんは神戸出身。大阪の九条新道で腕を磨き、明治後期には現在の中崎西の長屋を作業場兼住まいにするようになった。

「その源三郎じいさんに無理から引っ張り込まれてこの仕事を始めました。今はケーキ屋やペンキ屋が使う篩（ふるい）をつくっているところです」。小さなものでは雨樋（あまどい）の中に入れる、葉っぱがつまらないようにするための金網もつくっているそうだ。

仕事の依頼主は昔から大きく変わることはなく、建築関係や金物店からの依頼が多い。

「昔は済美も職人さんがたくさんおられました。空襲で焼けなかった地域だから、古くからの商売をされている方が残っていたんでしょうね」

同じように済美で商売をしている同級生が3人いて、たまにみんなで会って飲みに行くのだとか。

「以前は通りの斜め向かいにあった喫茶店のような居酒屋のような［喫茶M］（笑）に集まっていて、ランチもよく食べに行きました」

済美の街は、20年前までは若い人が訪れるような街ではなかったと言う。「今は路地の奥でも若い人がお店を経営していたりするでしょう。昔はお年寄りしか通らなかった道ですよ」と、街の細部まで魅力が広がっていることを喜んでいる様子だ。



仕事は朝8時から夕方5時。「昔は遅くまでやっていましたが、もう67歳ですから」

戦前生まれの工場を済美育ちの三代目社長が牽引。

株式会社堀川製作所［理化学機器］　堀川貴彦さん

Takahiko Horikawa

中崎2丁目の住宅街の中に理化学機器を製造・販売する株式会社堀川製作所がある。「うちは元々ものをつくる会社ではなかったんです」と語るのは3代目社長の堀川貴彦さん。理化学機器の販売会社だったものの、工場や大学での需要が増えたため職人を2人招聘して、昭和20年代後半から製造をスタートしたそうだ。

昭和40年代は実験施設や化学工場で使う理化学機器を扱った。最近では住宅関連の工業製品に需要が移りつつあり、私たちにとって身近なところで言えば、照明器具用のガラス製品などをつくっているそうだ。

現在14名の社員が勤務し、工場の2階ではガラス職人たちが熱い炎の前でガラスを曲げる作業を行っている。仕入れたガラスの状態が悪いと加熱中に割れることもあり、極度の集中力が求められる。また別の部屋では年配の職人がガラスを研磨する作業を行っていて、こちらも集中力だけでなく、長年の経験と勘が必要な仕事だ。

貴彦さんは生まれも育ちも中崎町。「昔はメリヤス屋さんとか箱屋さん、鉄工所などが多くて、常に何かをつくっている音が聴こえてきたなあ。お風呂のある家の方が少なかったので、葉村温泉（P16）にはよく行きましたね。その隣の［池内］という駄菓子屋には子どもたちが集まっていたし、済美公園の横にも昔は駄菓子屋があったんですよ。子どもがたくさん住んでいたんでしょうね。砂利の空き地や駐車場で遊んでいました」



1980年代は高層ビルやマンションも少なかったため、会社屋上から梅田まで一望できたそう

よく行く常連の喫茶店で「お店やらへん？」と誘われたのが始まりでした。



マ！カレー［カレー店］/ ニュー MASA［喫茶店］
片牧尚之さん　Naoyuki Katamaki

舞台演出や映像制作、イベントのチラシ制作などクリエイティブな仕事をしていた2000年頃に中崎西に住んだ際、後に譲り受けることになる［喫茶 正］の常連客に。現在もデザイナーの仕事を続けている。

もともとこの店は［喫茶 正］という喫茶店で、僕はその店の常連客でした。入口付近に自販機があり、最初はとても入りにくい雰囲気だったんです。でも勇気を出して入ったんです、なにせモーニングが300円でしたから（笑）。お客さんは近所の定食屋を営むハルコさんや隣の井下さんぐらいでしたが、みなさんが「どこに住んでいるの？」とか話しかけてこられのが衝撃でした。でも、それが楽しくて。

常連の中で唯一僕が若者で、ちょうど料理学校に通っていたこともあり、ある時、先代から高齢を理由に「お店を閉めようと思うけど、何かするんやったら好きにしていいで」と持ちかけられました。常連さんの行き場も確保したくて、「やらせてもらいます」と言ってお店を譲ってもらったんです。内装もそのまま、名前も引き継いで［ニューMASA］という名で再オープンしました。

僕がお店をはじめてからも常連客が話しかけてくる空気はそのままです。昔から済美でやっておられるお店の方が来られていて、若いお客さんも来ていて、カウンター越しに互いにしゃべっているとそのうち二人がしゃべり始めて。済美の垣根のない雰囲気が好きですね。

途中、2代目店主の僕がお店を抜け、3代目、4代目と店主が変わりましたが、また僕が戻ってきて、現在は平日にカレーライスのお店［マ！カレー］として、土日は喫茶店の［ニューMASA］として営業しています。夜もお店を開けていますよ。

気取りすぎない雰囲気が好きで、出店するならここと決めていました。



ささのはパン［ベーカリー］
笹倉みほ子さん　Mihoko Sasakura

以前勤めていた職場近くのパン屋さんが好きで、閉店してしまったもののその味が忘れられず、自分で作ったのがパンづくりにはまったきっかけ。中崎町には以前からよく訪れており、街の雰囲気がとても気に入っていたのだそう。

済美界隈は［ライツ］や［ピースマザー］といった好きな店があったので、天六に住んでいた頃からよく来ていました。自家製の天然酵母を使ったパン屋をやるなら、こののんびりした空気があっていると考え、済美で物件を探していました。

不動産屋さんに紹介してもらった当時のこの物件は、竹を扱う会社の支店のような場所で、見に来たときはまだ竹の皮が置いてありました。

お店をオープンしたのは平成21年（2009）です。私の名字が笹倉ということもあり、パンダは笹の葉を食べているベジタリアンなイメージだったので、ささのはパンと名づけました。でも、あとで知ったのですが、パンダは肉食系らしくて（笑）。雑誌に何度か紹介してもらった影響からか、関西各地から来てくださる方がいてありがたいです。

卵・乳製品を使っていないのもあって、アレルギーをお持ちの方や親子連れのお客様もよくお見かけします。顔なじみの方も増え、パンを介して「あの本おもしろかったよ」と、本の話をするのが好きで、本をテーマにした新商品のパンをつくれないかと思っています。クリスマスの季節は毎年シュトーレンを焼くのですが、「楽しみにしてるよ」と声がけしてくださる方がいるのが嬉しくて。

済美にはめっちゃお洒落な人もいれば、地元のおっちゃんが自宅だけで許されるような（笑）格好で自転車に乗っている姿が入り交じっている。そんな気取りすぎない雰囲気が気に入っています。夜が静かなのもいいですね。

ONLY PLANET［動物雑貨店］

甲斐雄一さん　Yuichi Kai

大学卒業後カナダに渡り、ホテルマンとして勤務。帰国後は大阪を代表するホテルのフロントで働くかたわら、海外へのバックパック旅を楽しむ。11年間のホテルマン生活ののち、自分で何かをやりたいと考えて動物雑貨店をオープン。

昔ながらの家と、その向こうの高層ビルとの対比が面白くて。



ホテルで働いた頃は天神橋筋7丁目に住んでいたのですが、雑貨が好きなのでこのあたりの雑貨屋さんによく来ていました。たまたま中崎3丁目を歩いていたら、タイミングよく「物件貸します」の札を見つけ。何かお店をやるならこの街でしたいなと思っていたので、物件を見た2日後にはホテルを辞めると決意して、数カ月後の平成24年（2012）3月にお店を開店しました。

雑貨好きの方とお話ししたいから、雑貨屋の多いこの街はちょうどいいですね。動物の雑貨を扱ったお店は他にも多く、「動物加盟店」というネーミングでゆるく連携し、動物好きな人が回遊できるように互いにお店のチラシを置いて紹介しあっています。

地域の方もよく来てくださり、特に年配の方は干支ものや縁起もののフクロウの雑貨を買ってくださる方が多いです。表に英語ができることを表示しているので、海外の方もよく来店されます。台湾、香港、韓国などアジアの旅行者が多いですね。

この街の魅力は風景のギャップだと思います。昔ながらの長屋があって、その向こうにMBSの尖ったMの形をした高層ビルなどが見えて……。いろいろな国を旅してきましたが、この風景は驚きますね。

店はほぼ年中無休で、朝11時から夜6時まで営業しています。この界隈の飲食店は21時頃までの店が多く、どうせお金を使うなら地元で使いたいと思って、毎回知らないお店に出向くようにしています。

SALON de AManTO［カフェ］

Junさん　Jun

俳優の仕事がメインで、昔はオーディションにすぐ行けるように季節労働やストリートパフォーマーをしていた。現在は主にダンサーとして世界を旅しながら活動する。中崎西一振興町会の役員も務めている。

この街の職人さんたちのおかげで、長屋を改装したカフェを開店できました。



映画の役づくりのためにタイとビルマの紛争地域に足を運んだのをきっかけに、日本人が何を得て何を失ったのかが感じられる街を体感したいと思っていました。そんな時に、たまたま済美界隈に迷い込んだんです。カフェも改装も経験はなかったのですが、平成13年（2001）に10年間空き家だったこの長屋で「空き家再生パフォーマンス」を始めました。

ブルーシートなどでは囲わず、わざと改装している様子が外から見えるようにしたんです。まったくお金がなかったので、抜いた釘を叩いてのばしたり、廃材をリサイクルして改装したりしました。通られる方に「こんにちは」と挨拶しているうちに、「手伝おうか」という人が現れて。なんと1127人もの方に手伝っていただいたんです。

大工の仕事や内装のことは地元の方に教わりました。「このサッシ危ないぞ！」と教えてくれたのは通りがかりのサッシ屋さんで、電気関係を詳しく教えてくれたのは電気屋さんです。済美は職人さんが多くて、街の人に話を聞けば親切に教えてくれました。

お店が完成すると、手伝ってくださった地域の方が、自分がつくった店としてお友達に宣伝してくださって。彼らのお孫さん世代もたくさん来てくれるのですが、子どもはジュース1杯無料にしています。

町会の役員をしています。夏祭り、盆踊り、歩こう会、女性会などたくさん催しがあって、スローだけど地元の方が若者の話に耳を傾けてくださるのが嬉しいですね。

地域と共に、商いを続けることの大事さ。

島田吉雄さん（ナベル本庄内「鳥秀商店」店主）

Yoshio Shimada



私の店があるナベル本庄は、大正8年（1919）に本庄公設市場として、大阪市によって建設されたものです。大正12年（1923）に火災によって焼失したものの、翌年すぐに改築されました。大阪市電や阪神の路面電車が走っていて便利だったこともあり、戦後の復興期には大勢のお客さんでにぎわいました。その頃は、国鉄（現JR大阪環状線）のガードのところまで市場の建物がありました。当時の建物の屋根の部分に付いていた鳥の石像が、今の駐車場の中にある稲荷神社に残っています（左下写真）。

昭和49年（1974）、東側にマンションを隣接した新市場に改築。地下鉄中崎町駅が開業してスーパーができ、だんだんと客足が遠のき始めた頃ですが、約60店が入居しました（P30）。

平成6年（1994）にスーパー部門を作り、平成14年（2002）にはナベル本庄という名前に変わりました。公設市場の時代から残っている店舗は、私の店を含めて10軒ほどです。お客さんに手に取っていただきやすいよう、スーパー部門の鶏肉売り場にも品物を並べています。

店に来ていただくお客さんは、昔ながらの地域の方が多いですね。小さいお店ではありますが、品物のよさはどこの店にも負けない。そんな誇りを持って商売をやってきました。

品物の善し悪しを直接お伝えしたり、料理のアドバイスをしたりできるのは、対面販売ならでは。また、お客さんから「がんばってよ」と励ましの言葉をかけてもらうこともあります。長年ここで仕事をやってきた甲斐があったと、こちらも力がもらえて嬉しいですね。こうして、商売を続けていくことができているのは地域の皆さんのおかげだと、本当にありがたく思っています。

ずいぶんこの辺りも変わりました。大型スーパーができ、何棟もマンションが建って、若いファミリーの姿も多く見かけるようになりました。この2年は、新型コロナの影響もありました。それでも、地域の方に一人でも多く来ていただいて、うちの鶏肉を食べて「美味しい」と言ってもらいたい。厳しい時代ではありますが、前向きに頑張っていきたいと思っています。





右／大正8年の創設時の様子　左／戦後の公設市場の様子。都島通から環状線まで建物があった。その建物にあった鳥の石像が、今も残っている

曽祖父の代からお世話になっている地域に恩返ししたい。

西岡克弥さん（紅茶専門店［紅茶美人 Tea Beauty］店主）

Katsuya Nishioka



令和3年（2021）4月から紅茶専門店を夫婦2人で営業しています。建物はもともと曽祖父の家で、戦後間もない昭和23年（1948）築とさまざまな歴史を乗り越えてきたこの建物を何とか再生したいと思い、柱と梁を残してフルリノベーションに至りました。

私はもともと工務店で働いていて、リフォームに協力してくれる大工さんはじめ、職人さんたちは知っていたのですが、自身にデザイン力がありませんでした。そこで、ぜひ助けてほしい……という思いで依頼をしたのが始まりで、結果、3つの専門学校に協力していただき、店舗が完成しました。

1校目は西淀川区にある修成建設専門学校で、内装・外装のデザインや塗装・タイル貼りなどを。2校目は北区芝田の大阪総合デザイン専門学校で、外壁の壁画や立て看板を。そして3校目は同じ済美にあるECCアーティスト美容専門学校の特殊メイク造形アーティストコースの生徒さんたちに店頭の食品サンプルをそれぞれご協力いただいて。どの学校も飛び込みの提案だったのですが、快諾いただけました。

子どもの頃は川西市の能勢電の終点近くで育ちました。よく同級生が祖父母の家に行くことを「田舎に帰る」と表現していたので真似して言っていたら、済美はめちゃくちゃ都会だと親に笑われました。以前はコンビニも近くにないレトロな住宅街だったのですが、ここ20年で随分変わりましたね。

葉村温泉（P16）の向かいにあるマンションの場所は以前印刷工場で、祖父の勤め先でした。同じ自治会では祖母や曽祖父のことを知ってくださっている方がいて、その地域でこの歳になって関われていることにとても感慨深いものを感じています。先代からお世話になっている地域なので、協力できることがあれば微力ながらぜひ力になりたいですね。

済美は梅田からも近く、近年は住宅や商店よりも「テナント」が多い地域だと感じています。周りのお店の方と話をしていても自治会や地域活動の話が出てこなかったりします。この済美で働き、住んでいる住民として、今後は自治会とテナントさんの良い架け橋になれれば。

近くで一番お世話になっているのは隣の［入道］の大将や女将さんです。和食、創作料理のお店で、大将の船津義博さんは、休みの日もお店で料理の新作のメニューを考案されています。面白いアイデアがあれば「こんなん使ってみたら？」とレシピを教えてくれたりして、とても気にかけてもらっています。入道さんのような、ファンが多く長く続けて行けるようなお店になりたいですね。



5種類の紅茶とフルーツやシロップを選んでオリジナルの紅茶を楽しめる

学校法人山口学園と済美地域の「いい関係」

学校法人山口学園ＥＣＣ社会貢献・国際交流センター





お化け屋敷

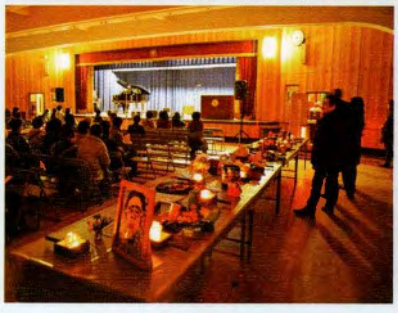
済美地域に３つの専門学校を有している学校法人山口学園は、町会をはじめ、さまざまな団体と協力関係を築きながら、積極的に地域のための活動を行ってきました。その歩みを、ＥＣＣ社会貢献・国際交流センターのみなさんに紹介していただきましょう。

２００１年春、ＥＣＣ国際外語専門学校に生まれたボランティアグループを活動起源とし、２００４年春、同校にＥＣＣコンピュータ専門学校・ＥＣＣアーティスト美容専門学校を加えた学校法人山口学園を母体に、ＥＣＣ社会貢献センターが設立されました。山口学園として済美地域とどのようにつながることができるか、大阪市北区社会福祉協議会に相談にうかがい、当時の済美社会福祉協議会会長の吉川郁夫さん（Ｐ32）をご紹介いただきました。

済美地域の課題やニーズをお聞きする中で、「夏祭りで子どもたちが楽しめるイベントを」というリクエストをいただき、２００８年夏の済美カーニバル（Ｐ４）の際、廃校になった済美小学校の体育館で、ＥＣＣアーティスト美容専門学校特殊メイクアップアーティストコースによる**「お化け屋敷」**を行いました。当日はこどもから大人までたくさんの方が足を運んでくだり、２日間でのべ８００人を超える方に楽しんでいただくことができました。

その後、「冬にも夏祭りのように地域全体が盛り上がり、一つになれるイベントを」という地域の声から、取り壊しが決まっていた済美小学校を使って、２００９年に**第１回中崎町キャンドルナイト**（表紙・Ｐ５）を地域の方々と実行委員会を組織して行いました。小学校の取り壊しを惜しみ、十数年前









キャンドルナイト





クリーン中崎町

の卒業生がかけつけるなど、済美小学校に感謝し、またお別れをするとても意義深いイベントとなりました。中崎町キャンドルナイトは2022年に第11回を迎え、大阪市北区役所、MBSなどと連携し、北区を代表するイベントとなりつつあります。

2009年3月には国際協力団体よりご相談があり、「スローなライフスタイル」「古いものを大事にし、循環するライフスタイル」を大切にしている済美地域と共に、「中崎町スローウォーク」と国際協力のイベントを多団体が協働し、創ることができました。

2007年に始まった地域内の清掃活動である**「クリーン中崎町」**は、毎月第3月曜日午後から1時間程度行っていて、地域住民、北部環境局、曽根崎警察、山口学園の学生・教職員たちが参加しています。掃除をしながら地域の見回りも兼ねていて、防犯活動にもなっています。

2011年からは、より本格的に学生の専門力を社会の課題解決に結ぶ教育活動である「サービス・ラーニング」に取り組んでいます。メイクの力で女性を元気にする**メイクサービス**、東日本大震災被災地復興支援のカフェ「カフェ・ラポール」、済美カーニバルや中崎町キャンドルナイトの**ポスター作成**など、地域のご協力の下、さまざまな活動が生まれました。

このように教育機関が地域と連携し、教育活動を生み出すことができたのは地域の方々が率直に意見を伝えてくださり、学生たちのチャレンジを温かく受け入れてくださったからだと感じています。済美地域で生まれたこれらの活動は現在、北区社会福祉協議会、大阪市北区役所、曽根崎警察署など、北区内のさまざまな組織と連携し、活動が広がっています。

2015年春からは、留学生と日本人学生が一緒に社会貢献活動の創り手となるよう、「ECC社会貢献・国際交流センター」に発展し、「平和と幸福を希求してやまない、こころ豊かな社会人の育成をはかる」という山口学園の理念をより具体的なカタチにする日々が始まっています。

済美地域も他の地域と同じく少子高齢化や、地域のつながりの希薄化という課題を抱えています。地域の方々がそれらの課題に対して、皆でアイデアを出し合い、新しい活動を創り出していく姿を、学生たちは活動に参加する中で見て、学んでいます。この地域に関わった人たちが、済美地域を第二の故郷のように感じ、またここでの経験を活かし、自分の地域もより良く変える人となっていく、それがこの済美地域の良さではないでしょうか。





メイクサービス





ポスター作成

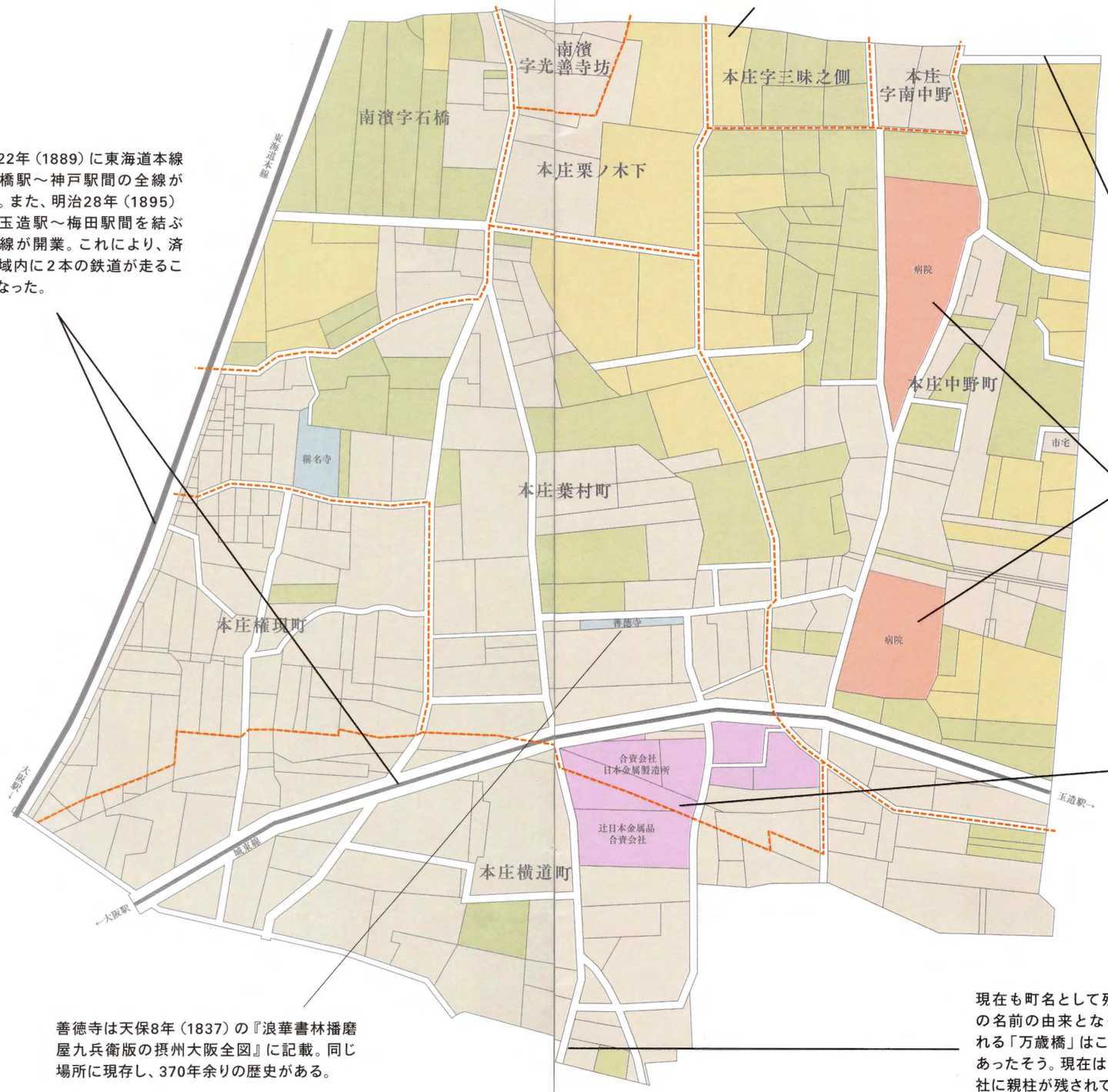
昔と今の暮らしと風景。

地図でふり返る昔の街のすがた

明治44年

（1911）

明治31〜34年（1898〜1901）統計によると、大阪の主な農作物は、食用＝大豆、小豆、甘藷、大根、葱、特用（食用以外）＝菜種、葉藍などである（『大阪市政一斑.第5回（明治35年）』より）。済美地域でもこれと同様の農作物を育てていたと推測される。また、別地図で地域内に水路が敷かれている。生活用水、あるいは農業用水だったと思われる。



明治22年（1889）に東海道本線の新橋駅〜神戸駅間の全線が開業。また、明治28年（1895）には玉造駅〜梅田駅間を結ぶ城東線が開業。これにより、済美地域内に2本の鉄道が走ることになった。

明治43年（1910）、北区西野田茶園町と天神橋筋六丁目間を結ぶ阪神電車北大阪線が開通。自動車との併用軌道を走る路面電車は、済美地区の開発を後押しした。昭和50年（1975）廃止。

本庄中野町に大きな敷地を持つ2つの病院がある。その後、南側の病院跡地には本庄公設市場（1919年創立）が、北側の病院跡地には済生会病院（1935年頃）と大韓民国居留民団大阪府本部（1947年結成）が置かれる。

城東線南に合資会社日本金属製造所、辻日本金属品合資会社がある。済美地域ではその後、金属工場が多く立地することになる。

善徳寺は天保8年（1837）の『浪華書林播磨屋九兵衛版の摂州大阪全図』に記載。同じ場所に現存し、370年余りの歴史がある。

現在も町名として残る万歳町の名前の由来となったと言われる「万歳橋」はこのあたりにあったそう。現在は、綱敷天神社に親柱が残されている。



江戸時代の古地図を見ると、その多くで済美地域付近が白地になっており、開発されていなかったことがわかる。水運が主であった江戸時代において、大きな川に接していない済美地区は、歴史の表舞台に立つことはあまりなかった。

しかし、明治7年（1874）に大阪駅〜神戸駅間の鉄道が開業。その後、明治22年（1889）に東海道本線全線が、明治28年（1895）に城東線（現大阪環状線）が済美地域内を通るようになると、田圃が広がっていた場所にも民家が増えていく。大阪市制施行時の明治22年（1889）時点でも、済美地域は大阪市に含まれていないが、徐々に開発は進みつつあった。

明治44年（1911）の地図はその過渡期を示しており、鉄道沿い、かつ大阪駅に近い西側に細かい区割りの民家が集中し、鉄道沿いから離れたエリアは田畑が広がっている。

宅地　寺院
田　病院
畑　企業

地図でふり返る昔の街のすがた

昭和40－41年

地図提供／日本特殊地図協会



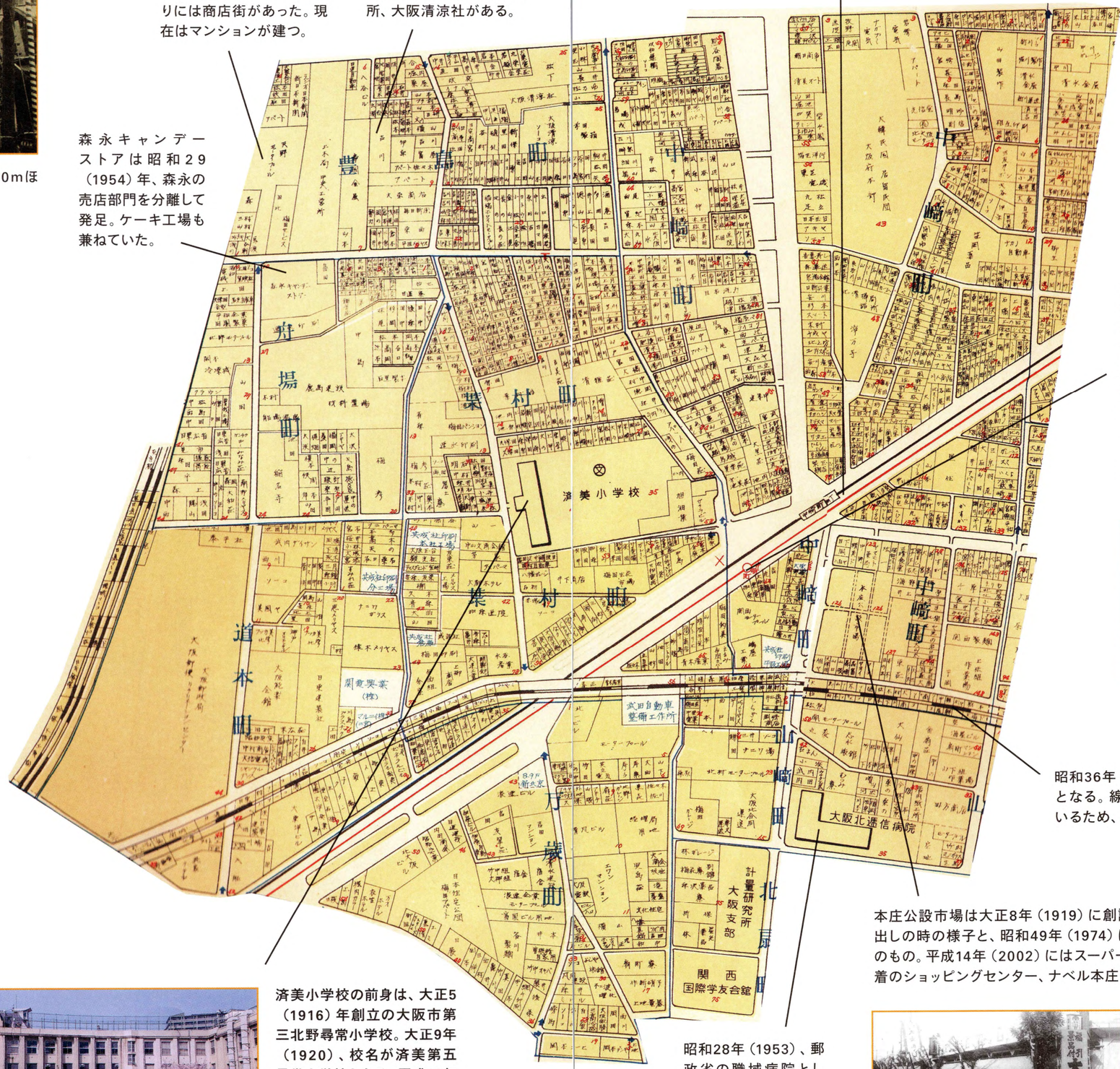
北野館の周りにあった商店街の様子。100mほどにわたり、のぼりが立っていたそう。

天野モータプールの場所に、大正～戦前まで映画館「北野館」があり、その周りには商店街があった。現在はマンションが建つ。

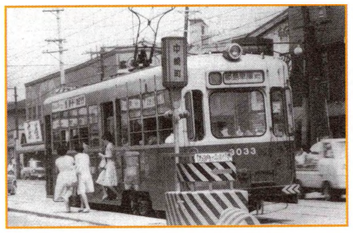
新日本新聞社、ラジオ日本新聞、日北工営所梅田出張所、土木局中央工営所、大阪清涼社がある。

森永キャンデーストアは昭和29（1954）年、森永の売店部門を分離して発足。ケーキ工場も兼ねていた。

昭和42年（1967）、地下鉄谷町線東梅田～谷町四丁目駅間が開業。この地図上では路面電車とバス路線が都島通を並走している。



大正8年（1919）、梅田善源寺町線阪急電車前停留場～高垣町停留場間が開業。翌年、天神橋筋六丁目（東）停留場～淀川停留場間開業。当初は大阪駅前を起点としていたが、御堂筋の交通量増により昭和39年（1964）、大阪駅前～阪急東口間が廃止となる。廃止の昭和44年まで阪急東口が起点となっていた。大阪市電で最後まで残った路線の一つ。これらのほか、大正2年（1913）、地域の東側を走る、樋之上町～天神橋筋六丁目間を結ぶ市電天神橋西筋線が開通している（1966年廃止）。



昭和36年（1961）、城東線が大阪環状線となる。線路沿いに細かく区割りされているため、高架だったと推測される。

本庄公設市場は大正8年（1919）に創設。右の写真は昭和5年（1930）の大売り出しの時の様子と、昭和49年（1974）にマンションを併設して新市場となった時のもの。平成14年（2002）にはスーパーマーケットと生鮮市場が合体した地域密着のショッピングセンター、ナベル本庄となった。







済美小学校の前身は、大正5（1916）年創立の大阪市第三北野尋常小学校。大正9年（1920）、校名が済美第五尋常小学校となる。平成16年（2004）、扇町小学校への統合により閉校した。

昭和28年（1953）、郵政省の職域病院として大阪北逓信病院開設。同位置に現存。

済美地域における戦時中の空襲被害は、全域が焼け野原になった万歳町を除けば、他のエリアの被害は少なかった。中崎西1丁目をはじめ、現在も古くからの街並みが多く残るのは、このためである。

昭和40年（1965）頃の済美地域では、明治44年地籍図で田畑があった土地が小さく区割りされ民有地となり、地域内の田畑はなくなった。地域全体として金属工場、製麺工場、メリヤス店、ガラス店、印刷会社などが多く、空襲被害が大きかった万歳町にも民家や事業所が立ち並んでいる。

また、本庄中通、南濱（みなみはま）などの大阪市電の停留所が置かれ、特に地域中央の中崎町停留所を中心に住宅地や学校、市場など、にぎわいを見せている。明治から昭和初期まで、市内交通を担ってきた市電が、御堂筋を中心とした自動車交通の発達により昭和44年（1969）に廃止された。

この地図は3本の市電路線が地域を通っていた最後の時代を示している。

❸【済美小学校の記憶】

地域活動の「真ん中」であり続けるために。

吉川郁夫さん（北区民生委員児童委員協議会 会長）

Ikuo Yoshikawa



済美福祉センターは、済美小学校跡に作られた地域活動の拠点です。平成16年（２００４）３月に小学校は閉校となり、その跡地５千平方メートルのうちの４割、２千平方メートルが現在、センターの敷地となっています。

済美地区を代表するイベントが済美カーニバルですが、今の形になるまでに、40年近くかかりました。最初は済美小学校の校庭に提灯をぶら下げて、櫓を組んで、婦人会が盆踊りをするというものでした。それから地域で子ども会を作り、皆さんの協力を得てカーニバルを今の規模にまで広げることができました。

焼き芋交流会も済美小学校で始まりました。校舎が取り壊される前の平成18年（２００６）頃、跡地の有効利用を検討している時期に、敷地内に畝をつくって芋を栽培。それを収穫してみんなで食べようというのが始まりで、グラウンドで焚き火をして、芋を焼いたんです。

ここがなくなったら地域の人が集まる場所がなくなってしまう。場所があることがすごく大事で、学校がなくなっても、ここが地域の活動の拠点であり続けなければいけないと思います。

北区の人口比率で言うと、高層住宅に暮らす人が９割、一戸建てに住む人が１割という構成です。済美地域にも古い家屋はまだ残っていますが、住民の方は亡くなられたり、施設に入られたりする方も増えて、古い方が少なくなっていく一方、新しい方が入ってこられています。

我々も世代交代といいますか、いかにうまく、古い世代から若い世代へ橋渡しをするかを考えています。特に、この２年はコロナで地域の行事ができない状態でしたから、再開するときにはすごくエネルギーが必要になると思いますね。

商業地でありながら住宅地でもある済美地域のこれからですが、専門学校が３つあるので、その環境を活かして個人的には静かな文教地域になってくれれば、安心して住むことができる街になるのかな、と思います。

街は変化を続けていますが、皆さんにいつまでも愛着を持って住んでいただけるよう、イベントも含めて楽しんでもらえる街づくりにこれからも務めたいと思っています。





済美小学校の敷地内で行われた、サツマイモづくりの様子

「済美カーニバル」始まりのきっかけ。

久谷宣晴さん（元済美小学校ＰＴＡ会長）

Nobuharu Kuya



昭和56年（１９８１）から２年間、済美小学校のＰＴＡ会長を務めました。父親が教育熱心で、父親もまたＰＴＡ会長だったのですが、私も同じ道をたどりました（笑）。

ＰＴＡ会長になって２年目に、「済美にこども会をつくろう」という声が地域から上がりました。それで地域の方々と協力してこども会を発足することができ、そのお披露目イベントとして行われたのが済美カーニバル（Ｐ４）の始まりだったんです。昭和57年（１９８２）８月７日のことです。

昼間は地区内を回るパレードを行いました。私が先導して、扇町中学校の吹奏楽部の生徒や済美小のソフトボールチーム、キックベースボールチームのメンバーが行進し、みなさん家から出てきて、手を叩いて歓迎して下さいました。初めての試みだったのですが「大きな音を出して騒がしい」と怒り出す人なんていませんでした。

夜は盆踊りや屋台の出るお祭りをし、屋台もすべて地域の方々が手弁当でやっていただきました。たこ焼きを焼かれた方たちは、たこ焼き屋さんで作り方を事前に勉強してから本番に臨んでいました。それだけ真剣に取り組んでくださったのだと思います。

済美の人は凝り性な人が多いんです。これは今も同じだと思います。そして「こうすればもっとよくなる」と試行錯誤してちゃんと中身が伴っている。にぎやかさは今でも北区でナンバーワンじゃないかと思います。若い人たちが次々に参加してくれるのもありがたいことです

私が小学生だった昭和28年（１９５３）頃は、まだまだ貧しい時代でした。５・６年生の担任の先生が厳しい人で、大変よくしつけて頂きました。今ふり返ると、済美小学校の時代に、自分の人間としての基礎ができたように思います。中廊下のある校舎が重厚で格好よかったです。

それもあって、ＰＴＡ会長時代には、祝辞として「小学校は故郷だから、何かあったらまた戻ってきなさい」とよくお話ししました。そう思うと、地域に小学校がないのはやはり寂しいものですね。





済美カーニバルが初めて開催された時の様子

長屋の続く街並み、空襲のあった日。

京極俊明さん（中崎西一振興町会 顧問）
Toshiaki Kyogoku



済美で生まれて育って90年になりました。戦前・戦中・戦後、とりわけ空襲被災を経験しながら今なお住んでいるという人はもうほとんどおられないと思います。

私は、中崎西一振興町会の住民ですが、昭和53年（1978）の町名変更までは葉村町でした。地域唯一の公衆浴場は［葉村温泉］（P16）と歴史は残っています。

伝え聞いた話ですが、その昔、豊崎神社は水上にあり、往来の船着場があったと思われる辺りが「舟場町」（現在は中崎西3丁目）、そこから道が通じていたとして「道本町」（現在は中崎西2丁目）、中崎西4丁目の堀内さん宅から北大路を渡った辺りを「南浜」と呼称していたという話を、葉村町という町名の由来と共に聞きました。

戦前の済美地域は長屋が多く、私の家は二階建ての4軒長屋が2棟並んだ一角にありました。2棟の間に細い路地があり、井戸やお地蔵さんの横を通って一段下に降りた辺りには平屋造りの長屋が密集していたのを覚えています。

私の家の向かいが済美小学校であった関係で、北隣と三軒南隣に文房具屋さんがありました。南隣は薪炭業、北の端隣は豆腐屋、私の家は米穀商といった風に戦前は自営業が多く、他にはメリヤス業がかなりあり、酒屋・うどん屋・塗装屋・自転車屋・駄菓子屋などが軒を連ねる庶民の町でした。そんな穏やかな町並みも第二次世界大戦の空襲で一変してしまいます。

昭和20年（1945）6月1日のことです。当時私は旧制中学校の2年生でしたが、現在の中山文甫会館のある一帯（中崎西1丁目）が広場になっていて、用水池や防空壕が造られておりましたので、空襲警報発令と同時にそこに避難していました。今もって忘れもしませんが、バリバリッという大きな音で外を見ると、辺り一面が焼夷弾で火事になっていて、我が家の方向も黒煙と燃える炎が目に入りましたので、咄嗟に淀川の堤防を目指して乳呑み児の妹を背負った母と姉を促し急いで逃げました。

しかし東海道線路沿いに北へひた走る後からどんどん炎が迫り、とうとう豊崎神社の前辺りで火に囲まれてしまいました。コンクリート塀の上で燃えている油脂焼夷弾の炎はとても恐ろしく今でも目に焼きついています。

何とか炎をくぐり抜け、淀川の堤防を走りつづけ長柄橋まで辿りついた頃には空襲は終わっていましたが、今度は黒い汚い雨が降ってきて全身びしょ濡れとなり、精も根も尽き果てた状態でどうにか家に帰り着いたのでした。このとき目に飛びこんできたのは、我が家を挟んで両隣の3軒だけがぽつんと残っていて、西側・南側一帯焼け野原と化した何もかもない光景でした。我が家も西側は焼失し、家の中から東海道線が見えていたのを覚えています。

幸いなことに、済美小学校から北側の大半は火災を免れていました。しかし、それらの残った家屋も老朽化が進み、空き家が増えて憂慮していましたが、近年それらの古民家を活用して個性のある商いをする人が増え、それらに共鳴して往来する若い人たちも目立ち、地域活性化につながりつつあることは何よりだと思っています。

Seibi Talk

❺【万歳町のこと】

昔のままの町名であることの誇り。

山下康夫さん（元万歳町振興町会 会長）

Yasuo Yamashita



万歳町（ばんざいちょう）という町名は、昔あった小さな川に万歳橋（萬載橋）という橋が架かっていたからついたのだそうです。私自身はその橋がかかっているのを見たことがないので、ずいぶんと昔のことのようですね。神山町の綱敷天神社内に、その万歳橋の親柱が残されているそうです。

私自身もそうですが、万歳町に住む人たちは、この町名に誇りを持っています。ですから、昭和53年（1978）に町名が一斉に変更された際にも、「中崎○丁目」となるのを拒否しました。済美地域の中でも、万歳町だけは氏神さんが豊崎宮ではなく綱敷天神社で、「少し違うのだ」という意識があったことも関係していたかもしれませんね。

また、ここは元々北野地域の堂山町や神山町との関わりが深く、万歳町も同じように昔の町名のままでありたいと主張したのです。ちなみに、綱敷天神社のお祭りでは、万歳町は小太鼓を担当していました。

小さい頃は近所でよく遊びました。公園やため池のほか、塀に囲まれた大きな空き地があって、狭い隙間から入って行ったりして。公園では相撲の巡業が開催されることもあったんですよ。

今の万歳町では大きなマンションが目立っていますが、昭和40年代くらいまでは小さい家がたくさんありました。そのマンションの区画だけでも、30〜40軒の家が建っていましたから。当時は現在の中崎西の方と同じで、ものを作っている職人さんがたくさん住んでいました。メリヤス屋、ガラス屋、印刷会社、名刺屋……。済美地区の他のエリアとは異なり、万歳町は戦争で焼け野原になりましたが、戦後も小さな家や事業所が建ち並んでいたんです。

25年ほど前から、戦前からの計画道路工事に伴う立ち退きが始まりました。天神橋6丁目交差点の混雑を避けるためのバイパスです。私の家も移ることになりましたが、道路予定地の北の端の方だったので、立ち退いたのは18年前と比較的遅かった。

その後、マンションが増えて、スーパーマーケットのライフ中崎町駅前店がオープンしてからは、まちの雰囲気が大きく変わりました。昔から残っている建物は、4軒長屋1棟と空き家1軒だけですね。

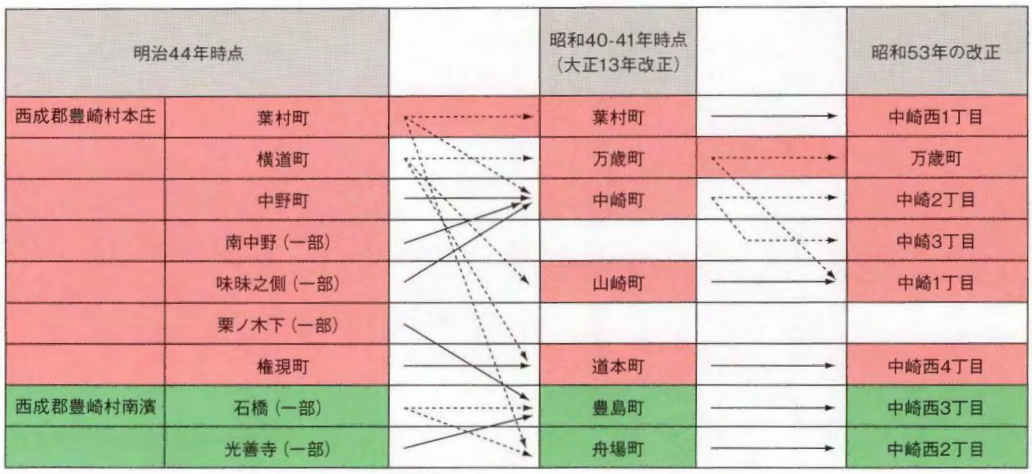




綱敷天神社の夏祭りの一風景。左が万歳町が担当していた小太鼓

済美地域の町名と人口の移り変わり。

済美地区の町名変遷



明治44年時点		昭和40-41年時点（大正13年改正）	昭和53年の改正
西成郡豊崎村本庄	葉村町	葉村町	中崎西1丁目
	横道町	万歳町	万歳町
	中野町	中崎町	中崎2丁目
	南中野（一部）		中崎3丁目
	味味之側（一部）	山崎町	中崎1丁目
	栗ノ木下（一部）		
	権現町	道本町	中崎西4丁目
西成郡豊崎村南濱	石橋（一部）	豊島町	中崎西3丁目
	光善寺（一部）	舟場町	中崎西2丁目

済美地域は、江戸時代は「豊崎村」と呼ばれていたと推定される。その後、明治44年（1911）地籍図では「西成郡豊崎村大字本庄」と「豊崎村大字南濱」によって構成されていることがわかる。大正14年（1925）に豊崎町（旧豊崎村）が大阪市に編入されたが、それに関わって、その前年に地名が改称されている。戦後では、昭和37年（1962）制定の住居表示変更を受けて、昭和53年以降、町名が変わっている。

→ 町域すべての編入

⇢ 町域の一部の編入

【旧町名の由来】

豊島町
この地一帯を豊島（てしま）の荘と称した史実による。

中崎町
旧町名の中野に由来。大正13年の改正により新町名「中崎町」が誕生。

葉村町
古い地名である西葉村、東葉村に由来。大正13年の改正により新町名「葉村町」が誕生。

舟場町
北野青物市場へ品物を運ぶ船の荷積場であったことから由来。大正13年の改正により町域変更。

道本町
大正13年の改正により新設。

万歳町
大正13年の改正により新設。

山崎町
大正13年の改正により新設。

済美地区の世帯数

※昭和53年（1978）に旧万歳町の一部が中崎1丁目に町名変更したため、昭和40年（1965）までの万歳町及び中崎1丁目の世帯数は、共に現在とは異なるエリアで算出している。

昭和25年時点	昭和53年時点	昭和25年	昭和30年	昭和35年	昭和40年	昭和60年	平成2年	平成7年	平成12年	平成17年	平成22年	平成27年	令和2年	平成27年昼夜間人口比率
万歳町	万歳町※	77	109	204	264	182	–	–	–	–	387	608	620	157.0
山崎町	中崎1丁目※	117	196	254	278	438	471	452	426	568	610	760	742	162.9
中崎町	中崎2丁目	741	800	831	911	303	264	244	287	377	484	531	691	2428.0
	中崎3丁目					235	188	153	231	292	551	480	506	124.2
葉村町	中崎西1丁目	423	486	455	494	448	340	365	421	522	583	708	717	100.2
道本町	中崎西2丁目	146	142	182	156	115	117	103	74	100	103	158	282	162.9
舟場町	中崎西3丁目	130	152	154	185	211	167	173	188	592	632	460	528	2428.0
豊島町	中崎西4丁目	216	224	214	245	327	407	489	454	538	488	629	696	124.2
合計		1,634	1,885	2,080	2,288	1,932	1,954	1,979	2,081	2,989	3,838	4,334	4,782	100.2

単位：世帯

■ は世帯数増

戦後、昭和25年（1950）から昭和40年（1965）まで、人口が増え続けていたが、大阪市電廃止などの影響により、昭和60年（1985）頃から世帯数が減少し始めた。平成7年（1995）から2000年頃にかけて、新御堂筋建設による立ち退きにより、万歳町と中崎西2丁目で世帯数が減少。一方、その他の地域ではマンション建設が進み、地域内全体の世帯数は増加した。近年は、中崎町の地域ブランドの浸透や都心居住人気の高まりによってさらにマンション建設が進み、2005年以降は各町で世帯数が増加。特に、2000年～2010年にかけては5年で約1,000世帯ずつと大きく増加している。

大阪市全体と比較すると昼夜間人口比率が低く、「住」もしくは「職住一致」の地域と言える。



済美の誰もが集う場所

済美福祉センター地域集会所
中崎町ホール





平成23年（2011）2月4日、旧済美小学校の跡地にできた済美福祉センター（設立の経緯は→P32）。

「地域集会所」「中崎町ホール」「済美中崎町コミュニティ広場」によって構成され、済美に住む人たちが自ら管理するユニークな公共施設です。町会の活動はもちろん、済美のさまざまなイベントはここを舞台にしていて、表紙は令和4年（2022）2月12日にこの場所で開催された中崎町キャンドルナイトです。

また、済美福祉センター前の掲示板には防災マップが設置されており、AEDの設置場所などがわかるようになっています。マップの内容は各町会の会長だけが更新でき、地域の防災の拠点でもあるのです。

中崎町ホールの利用について

中崎町ホールは、最大収容人数180名の多目的ホール。催しの内容に合わせて、テーブルや椅子だけでなく、音響設備や照明、スクリーンなどを自由にアレンジすることができます。詳しくはホールに設置されているパンフレットなどをご覧ください。

TEL 06-6375-2100　10:00～16:00（月、火、木、金）　http://www.nakazakichohall.com/

大阪の下町の原風景、住みこなす知恵の歴史を引き継ぐ。

インタビュー
谷 直樹（大阪市立大学名誉教授）



地下鉄中崎町駅がほぼ中心にある済美地域は、梅田から歩いて10分程度と、とても便利な街だと思います。梅田に行けば百貨店があるし、天満や天六の方に行けばにぎやかな市場があります。

済美は半径500mに生活利便施設が揃っています。日用品が買える市場もあれば、大きな病院もある。風呂屋さん、集会所、郵便局、診療所、そしてもちろん中崎町駅もある。日々の暮らしをする上で必要な施設が揃っているのは、住みやすい街の条件の1つでもあります。本当に贅沢な地域だと思いますね。

済美の街が発展した経緯

江戸時代、済美地域や梅田界隈は、梅田が昔「埋田」と言われていたように、田んぼが広がる村だったんです。

明治7年（1874）、大阪駅～神戸駅間の鉄道開業と共に、梅田に鉄道駅が設置されてから、梅田は急に大阪の表玄関へと変化を遂げました。ちなみに、大阪駅ができる前の大阪の玄関口は、西区の川口あたりでした。大阪城は西側に大手門を構え、そこから海の方向、すなわち西に向かって城下町を作ったので、それら2地点を結ぶ東西方向の通りがメインストリートでした。

そして、梅田のそばにある済美で都市開発が進んだのは明治時代です。近代、大阪の街はバームクーヘンのように都市開発が進んだのですが、済美は開発の第1段階で形成されていきました。第1段階の開発では、田んぼのあぜ道がそのまま道路となる形で進んでいるので、済美の入り組んだ路地はその名残であると考えられます。

街に住む知恵は蓄積される

大正末から昭和初期に、大阪市長を務めた都市計画学者の関一は、済美のような第1段階に形成された街については、あまり良いとは思っていなかったようです。

確かに、細い路地や行き止まりが多くあり、古い木造住宅は火事や地震などの防災面で問題になります。しかし、戦災に遭わずに焼け残った今では、それらが街の風情になっていますし、これは大阪の下町の原風景であると私は思います。

近代的に開発された街は、車が通りやすい、街の構造がわかりやすいなど、良い面はもちろんあるけれど、失われてしまったものも多い。とりわけ、「住み心地の良さ」については、時には人々が慣れ親しんだ街並み・景観や鎮守の森を失くしてしまうなど、良くないことの方が多いと思います。

その点、済美は一見、開発が進まなかった街のように見えますが、そこに住まう人々が土地への愛着を持ちながら住みこなしていくことで、地域の歴史や生活文化がコツコツと積み上げられているように思います。大阪の近代的な街の発展が行き詰っている今だからこそ、済美の街が見直されているのだと思います。

たに・なおき

大阪市立大学名誉教授。大阪くらしの今昔館前館長。京都大学大学院工学研究科建築学専攻博士課程修了・工学博士。専門は建築史・居住文化史・博物館学で、主な著書に『まちに住まう－大阪都市住宅史』（共著）、『まちに住まう知恵－上方三都のライフスタイル』など。ＮＨＫ連続テレビ小説『カムカムエヴリバディ』『あさが来た』の風俗考証を務め、北区が舞台の『ごちそうさん』では時代考証を務めた。

子どもと高齢者の交流を

地域での幸せな暮らしをはかる指標の1つとして、子どもと高齢者の交流があります。昭和30年代にはどこでも交流があったのですが、核家族化が進んだ今は本当に減ってきました。その点、済美ではいろいろな行事があって、お年寄りから子どもまで集まっているので、とても幸せな街だと思います。

ただ、地域の真ん中にあった済美小学校が閉校になったのは残念ですね。一般に、地域の要職についておられる方は小学校の卒業生であることが多いです。また、コミュニティのまとまりがある地域は、小学校がその中心にあることが多いです。

地域にはマンションが増えているようですが、マンション住民は利便性を重視するため、住民の地域への帰属意識は薄れていきます。そういった住民を地域へ巻き込むには、子どもを地域活動に参加させることが重要です。子どもを通じた親の縁から、小学校の卒業生の親御さんと、新しい住民をつなぐことができると良いと思います。

小学校が閉校したのが平成16年（２００４）なので10～20年後であればまだ卒業生がたくさん住んでいるでしょうが、その先どうやって維持していくのか。例えば小学校の機能にとって代わるような生涯学習機能を、地域内に継承していく必要があると思います。

ＮＨＫ連続テレビ小説『あさが来た』の新次郎は、仕事はそこそこ、お茶や三味線などの芸事に精を出しています。しかし、昔の大阪はこういった文化に造詣の深い人がパトロンとなり、街を支えてきたとも言えます。済美でも文化的なネットワークを広げていく働きかけは大事だと思います。



済美小学校が閉校する際のセレモニーの様子

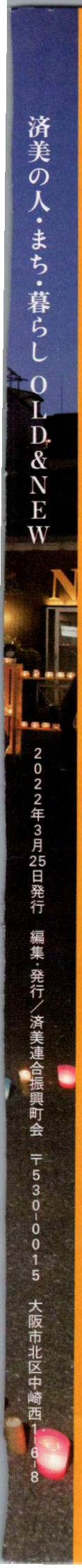
「街の作法」を大切に

現在、中崎町駅周辺には、若い人が新しく店を出すケースが増えていますが、建築的にはあまり好ましくない使い方をしているように私は感じています。ＤＩＹで、壁に色を塗ったり、柱や梁を抜いたりしているようですので、そのお店が地域から出て行ってしまうと、その建物は次に入居する人が使いこなせない状態になります。

昔の船場の街では、表長屋に住む人に対して、「ここを出るときは元の状態に戻しなさい」と、大家さんと住む人で契約文書を取り交わしていました。そんな、街の作法を今も大事にする必要があるのではないでしょうか。

例えば、新しく入ってきた人に対し京都の街では、地域と同化し、さらに洗練させる役割を果たすことを暗に求める傾向にある一方、大阪は相手を楽しませるよう、入ってきた人に同調するきらいがあります。しかし、これが街づくりでは良くない。

折角、街に蓄えてきたものが多くあるのに、人に合わせてしまうことでそれが維持できなくなる。迎合しなくても、もっと地域の伝統に入り込んでもらい、一緒にコミュニティを継承してもらうことで、地域を洗練させていくべきだと思います。



町会へ入りたい
行事に参加したい
地域活動を手伝いたい

済美連合振興町会と一緒に街を盛り上げませんか？

町会への加入のしかたや行事のスケジュールなど、済美連合振興町会の活動に関するお問い合わせやご相談は、済美福祉センターにて受け付けています。お電話もしくは窓口にてご対応します。開館時間は以下の通りです。お気軽にお尋ねください。

済美福祉センター

住所 大阪市北区中崎西1-6-8
TEL 06-6375-2100
開館時間 10:00～16:00（月・火・木・金曜）

済美の人・まち・暮らし OLD&NEW

2022年3月25日改訂版発行

編集・発行 ..... 済美連合振興町会
企画・制作 株式会社140B
デザイン ..... 角谷 慶（Su-）
表紙写真 ..... 浜田智則
取材・文・写真 ..... 関 真弓　狩野哲也
地図 ..... 齋藤直己

※本事業は大阪市地域活性化事業基金（ポートピア梅田環境整備協力費）により実施しています。

2022年3月25日発行　編集・発行／済美連合振興町会　〒530-0015　大阪市北区中崎西1-6-8